

津島短編小説コンテスト

平成28年度受賞作品集―愛知県津島市が舞台の短編小説

大賞

ダナモさん

佳作

天王通りの喫茶店が売られる日

佳作

大きな金魚





目次

受賞者	1
選考講評	2
受賞作品	4
大賞	
「ダナモさん」	寅間 心閑
佳作	
「天王通りの喫茶店が売られる日」	鷺尾 裕二
佳作	
「大きな金魚」	舛田 順一
応募結果	23
募集要項	25

大賞

ダナモさん

寅間 心閑

東京都渋谷区



なるべく穏やかで、ゆったりとした物語にしたいと
考えていました。奇を衒わず淡々と描いてみよう、と。
今回、素敵な賞を授けて頂いたことで、その目論見は
あながち外れていなかったのではと、安堵しています。
この受賞を励みとし、更に精進していく所存です。

佳作

天王通りの喫茶店が売られる日

鷺尾 裕二

三重県四日市市



私自身のかなり前の記憶と、津島
の町並みを掛け合わせたら、こんな
物語が出来ました。対外的にほぼ処
女作のこの作品に光を当てていただ
き、また高い評価を頂いて光榮です。
この作品が津島の町の魅力再発見に
少しでも貢献出来たのであれば、喜
ばしい限りです。

大きな金魚

舛田 順一

香川県多度津町



津島市を営業で何度もお訪ねする
うちに、大好きな街になりました。
この賞の募集を知り家の近くの津嶋
神社と津島神社が、一字違いなのに
縁を感じ応募しました。佳作という
高い評価をいただき感動しております。
私は今年還暦を迎えますが、本
当に良い記念となりました。

選考講評

選考委員長

堀田 あけみ

(作家・大学教授)



1964年 愛知県七宝町(現あま市)生まれ。作家・心理学者・椛山女学園大学教授。
1980年 中村高校在学中に『1980アイコ十六歳』で文藝賞受賞。

「ダナモさん」は、まず「脱皮」という表現で、物語に引き込まれました。思い切った行動をとる主人公の心の動きに無理がなく、丁寧を描かれていて、自然に彼女を、そして「悠々」を応援したくなる、大賞にふさわしい作品です。愛すべき店が消えて行く「天王通りの喫茶店が売られる日」は、一番大切な、おばさんと最後のランチを食べるところで、感情表現さえ、もつと細やかであれば大賞も狙えたと思います。「大きな金魚」は、アイデアが倒れになりそうな素材を上手く仕上げていると思います。謎ときと心の動きがバランス良く物語を進めて行きました。多様な作風の中、「今の津島市」が生き生きと描かれた三作を選ぶことができ、安心しています。

【主な著書】

『イノセントガール』『唇の、することは。』『発達障害だって大丈夫』『おかあさんになりたい』『おとうさんのつくりかた』『花くらべ』『泣けてくるじゃない』『もういない、あなた』など。

清水 義範

(作家)



1947年 名古屋生まれ。作家。
1981年 『昭和御前試合』で文壇デビュー。
1986年 『蕎麦ときしめん』で前例のないバスターシュー(様式模写)の分野を開拓。
1988年 『国語入試問題必勝法』で吉川英治文学新人賞受賞。
2009年 中日文化賞受賞。

「ダナモさん」は傷ついた心が癒されていく話だ。それが津島市の一軒の居酒屋を舞台にさりげなく、リアルに語られている。ひよんなことから来た街だが、いいところだったな、というつぶやきが聞こえるような気がする。「天王通りの喫茶店が売られる日」には、歳月と、人の情が感じられる。丁寧な語り口が好印象である。津島市の今、が感じられた。「大きな金魚」は、二つの津島神社というアイデアで、謎が解けてくる具合がドラマテックだった。少し無理な展開もあるが読ませる。

【主な著書】

『金鯱の夢』『永遠のジャック&ベティ』『イマジジ』『おもしろくても理科』『尾張春風伝』『愛と日本語の惑乱』など。

清水 良典

(文芸評論家)



1954年 奈良県生まれ。
文芸評論家・愛知淑徳大学教授。
群像新人文学賞(評論部門)受賞。
1986年
1993年 名古屋市長芸術奨励賞受賞。
2011年 愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。
2012年 第65回中日文化賞受賞。

捨てた男を追って東京から津島へやってきた若い女性を描いた「ダナモさん」の若々しい等身大の語り口が実に魅力的だった。「脱皮」のメタファーの使い方が鮮やかだ。

「天王通りの喫茶店が売られる日」は、地方の銀行員の目からリアルに新旧入れ替わりの進む地方の現実を描いていた。

香川県と愛知県の二つの津島神社を結びつけた「大きな金魚」のスケールの大きさは、読みながらワクワクさせられたが、結末の同姓の女性との「再会」は、ちょっと性急だった気がする。

他に、「渡し賃」のたくましいリアリズムに小説的な興奮を覚えたことを申し添えておく。

【主な著書】

『笹野頼子 虚構の戦士』
『自分づくりの文章術』『村上春樹はくせになる』『2週間で小説を書く!』『MURAKAMI』『文学の未来』『あらゆる小説は模倣である』など。

熊澤 尚人

(映画監督・脚本家)



1967年 名古屋市生まれ。
映画監督・脚本家。
1994年 映画『リベラ』がPFFに入選。
2003年 短編映画『Tokyo Noir～Birthday～』がスペイン映画祭に招待。ポルト国際映画祭最優秀監督賞を受賞する。
2005年 『ニライカナイからの手紙』で長篇映画デビュー。

全体的に、津島市のノスタルジックで温かい土地柄を表現したものが多かったのが印象深かった。

「ダナモさん」は心情描写や、会話の表現力に光るものがあり、映像化のイメージも湧きやすく、展開も面白かった。

「天王通りの喫茶店が売られる日」は、地方銀行員の日常がリアルに描かれている点は良かったが、所々、文章表現が雑なところが見受けられ、そこが残念に感じた。

「大きな金魚」は、物語がドラマチックで、ミステリーの謎解きも工夫を凝らされていたが、ラストの展開が少々、うまいいきすぎている印象を受けた。

【主な代表作】

『親指さがし』『虹の女神』『雨の翼』『DIVE!』『おと・な・り』
『君に届け』『ジクスマ』『近キョリ恋愛』『ユリゴコロ(2017年9月、全国公開)』

木全 純治

(映画館支配人)



1948年 名古屋市生まれ。
1983年 名古屋市中村区の映画館シネマスコーレ支配人。(～現在)
椋山女学園大学非常勤講師、中部大学非常勤講師。

地域を舞台にした短編小説は、場所の特色、その地に住む人達の息づかいが感じられる作品が肝心となる。大賞の「ダナモさん」は、偶然、津島にたどりついた若き女性が、居酒屋の老夫婦の人柄に触れ、居酒屋にどう人達の心地良さに引かれていく。流れるようなストーリーが心暖まってる良い。

「天王通りの喫茶店が売られる日」は、融資係の女子行員が津島の新旧の現状を確認していく点が良く描かれている。

「大きな金魚」は、香川県と当地の津島神社を結びつける発想が、意外性があり面白い。
「ロング・スロージョグ」は読み応えがあった。

【主な芸術活動】

1992年 アジア文化交流祭代表(～1995年)
中日新聞ビデオ案内担当(～現在)
1996年 あいち国際女性映画祭ディレクター(～現在)
2005年 EXPO2005フレンドシップ・フィルム・フェスティバルディレクター
2007年 NHK文化センター映像制作講師(～現在)

大賞

ダナモさん

寅間 心閑

東京から津島に越してきたのは三ヶ月前。お正月が明けた頃だった。成人式の日には、本町筋を振袖姿の女の子たちが歩いてきた。綺麗だな。そう思うだけで、不安な気持ちが少し和らいだ。

そう、私は不安だった。知らない土地だから、は理由の半分。もう半分は無計画のせい。二十五歳にしては、ちょっと感情的だったかもしれない。別れた男を追いかけて、私は東京を飛び出した。

秋口に名古屋へ一人旅をした男は、新しい恋を見つけて東京へ帰ってきた。一緒に行けばよかった、と悔やむのも馬鹿らしい。男は良くも悪くも隠し事のできるタイプではなく、十一月になる頃、一方的に別れを切り出された。ごめん、と頭を下げるなんて卑怯なやり口だ。こっちには為す術もない。通い慣れた男の部屋で取り乱してはみたが、結局「また脱皮しちゃったんだな」と納得するしかなかった。

付き合いたての頃、前の恋人について尋ねたり妬いたりする

と、男は「もう覚えてないよ」と面倒くさそうに答えた。もちろん、それでは引き下がれない。手を替え品を替え粘ろうとする私に、「蟬や蛇が脱皮するのと一緒だから」と付け加え、それ以上は取り合ってくれなかった。

後日、「脱皮」という喩えに何人かの女友達が感心し、私もようやく納得できた。成長する為に脱ぎ捨てた皮。そんなものに嫉妬したって仕方ないじゃない、と。

でも実際に自分が「そんなもの」になってみると、話は全然違う。嫉妬さえされない立場だと理解はしているのに、どうしても受け入れることが出来なかった。

すぐにでも名古屋市内に引越すつもりだと、泣きじゃくる私に男は告げた。二十七歳・フリーターのフットワークは軽い。要らなくなった皮は、東京に脱ぎ捨てるつもりだったらしい。隠し事の出来ない男は、悪意がないから残酷だ。

泣きじゃくりながら、私は迷うことなく引越そうと決めた。フリーターなのはお互い様だ。そんな決心に気付かない

男はハンカチを押し付けた。まるで涙の理由が他にあるように、「ほら」と困ったような声で。

ハンカチを受け取ると、優しく頭を撫でられた。一瞬、涙の理由が他にあるような気持ちになり、慌てて「そうじゃない」と思い直す。そんな自分に苛立ち、男にも苛立った。あの時、私の悲しみは変質したのかもしれない。男の匂いがするハンカチに埋めた顔は、ぞつとするほど無表情だったはずだ。

一ヶ月後、津島に三日間滞在して今のアパートを契約した。当然、男には内緒だ。同じ名古屋市内にいなかったのは、脱ぎ捨てられた皮のつまらない意地だったかもしれない。後を追ってきたことを、そして私がそんな女だということを知られなくなかった。あまり近くに住むと、そのうち見つかってしまう――。そう考えるくらいは冷静だった。

名古屋駅まで電車で三十分。そんな条件の中から津島を選んだ。県内以外にも岐阜や桑名など候補地は多数あったが、決めるのに時間はかからなかった。感情的になると、妙な勢いがつくのかもしれない。

私の母親の旧姓は「ツシマ」だ。

津島での初日は慌ただしく、そして寒かった。街にはまだ正月の雰囲気が残っていたことを覚えている。

東京から運ばれてきた荷物を部屋に入れ、ダンボール箱を押

しのけて玄関までの動線をつくり、市役所で諸々の手続きを終える日が暮れていた。一旦家に帰り、初めてシャワーを使う。さすがに料理を作る気にはなれなかったので、財布だけを持って外に出た。

部屋着のスウェットにジーンズを履き、長いダウンコートを羽織る。ラフな格好だから、あまり派手な店には入りたくなかった。けれど引越し初日だから、ラーメン屋やチェーン店の居酒屋ではどこか味気ないし、カフェでは少し物足りない。いや、そもそもお酒を置いていないし……。

一月の寒さに肩をすくめつつ、見慣れない街を歩くこと二十分弱。ようやく、ちょうどいい店を見つけた。

県道を脇に入った道すがら、擦りガラス越しに灯りが漏れている。ただ、中が覗けないので入りづらい。東京だったら、きつと素通りしていただろう。でも思い切って入れたのは、寒さに耐えきれなかったからではない。表のホワイトボードに書かれた「ひとり鍋あります、女性の方歓迎!」という文字のおかげだ。店に入った瞬間、眼鏡が曇る。何も見えないけれど、「いらっしやい」という御主人の声と、美味しそうな匂いにホッとした。それがこの店、現在の職場だ。世の中、何が起るか分かりはしない。

※

居酒屋「悠々」はカウンターだけ、そして常連客だけの小さ

い店だ。五十代の店主夫婦と一人娘で切り盛りしていたが、半年ほど前に娘は大阪へ行ってしまったらしい。

私は彼女の担当だったランチ営業と夜の本営業、そして閉店後の後片付けを任されている。つまり、一日中ずっとだ。引越してきたばかりのフリーターにとつては、本当にありがたい。

ランチは朝十一時から三時間。夜の閉店は夕方四時半。午後九時になると、店主夫婦は店のすぐ裏にある自宅へ帰るので、そこからはドリンクしか注文できない。そして午後十時になると会計を済まして速やかに帰宅——。常連客たちは、このルーをきっちり守っている。呑んでいる時は賑やかな人が多いが、泥酔するような人はいない。

そんな店だから、初めて入ってきた私は質問攻めにあつた。確かに店の外観は観光客向けではない。けれど二年振りの一見客になるとは思ってもみなかった。

東京から引越してきたばかりということ、二十五歳のフリーターだということ、津島、というか愛知県について何も知らないということ……。別れた男の後を追つて、という理由以外は問われるがまま答えたと思う。

その時、隣に座っていたのがダナモさんだ。五十代、六十代ばかりの客の中で、一人だけ群を抜いて若かったのでよく覚えていた。多分三十歳くらい。ずっと瓶ビールを飲み続け、たまにウーロン茶をもらっていた。

店内に音楽はない。テレビが一台、神棚に並んで置かれているだけだ。内心その絶妙な音量に感心していた。誰も喋らなければ音は聞こえるが、誰かが喋り出せば聞こえなくなる。気がけばそんな雰囲気は段々と慣れていった。

料理も美味しい。名古屋っぽくなくてごめんね、と微笑む御主人がすべて作るという。すっかりリラククスした私は、勧められるがまま日本酒を頂いていた。美味しい美味しいと飲み進む私に、ダナモさんは「強いですね」と時折笑いかける。

色白で痩せ型、横顔の印象はインドア派。口数は少ないけれど、周囲の会話に対して時折呟く「そうだな」という言葉が耳に残った。彼の声は柔らかく、耳触りが良い。

何度目かに笑いかけられた時、私はこっそり彼に名前を付けた。それが「ダナモさん」だ。もちろん「そうだな」から取つた。たいした秘密ではないけれど、今日まで誰にも言ったことがない。

居心地の良さにひかれ、私は翌日も「悠々」に顔を出した。いや、その後も定休日の日曜以外は毎日、ランチタイムか本営業、どちらかに顔を出すようになった。

奥さんから店で働かないかと言ってもらったのは半月が過ぎた頃。ランチタイムだった。突然で驚いたけれど、断る理由などあるはずもない。隣で食べていたダナモさんも喜んでくれた。私以外で昼夜とも店に来るのは彼だけだ。いつもシンプルで

カジユアルな格好なので、勝手に自営業だと思っているが本人に尋ねたことはない。あまり知りたくない、というのが本音だ。私がダナモさんについて唯一知っているのは、彼が私の先輩、つまり二年前の一見客だったということだけ。

意識している、という自覚はある。あるけれど、私には東京から引越してきた理由もある。そして、東京から転送されてきた男の年賀状もある。まさか向こうから住所を教えてくださいとは思わなかった。

あけましておめでとうございます／今年もよろしくお願ひいたします

バカみたいだ。抜け殻ってこういうことなんだな、と虚しくなつて、初めて涙が出た。

いきなり乗り込んだりはしないけど、一度実際に行つてみよう。住所を知る前はそんな風に意気込んでいたが、いざ知つてしまふと話は別だ。まずは自分が落ち着かないと、と言い訳めいた理由を持ち出し、時間を稼ぐことにした。

津島に来て三ヶ月、「悠々」で働き出して二ヶ月半。もうすっかり春めいてきた。少し、時間を稼ぎ過ぎたような気がする。

※

働き出して二つの変化があった。まずは呼び方。御主人の提案で下の名前、「ミサト」で呼ばれるようになった。ミサトちゃん、なんて呼ばれるのは小学生の時からだ。少し恥づかしい。

もう一つは、顔。客だった時は、なかなか真正面から顔を見ることも見られることもなかった。どうやら私は「ネコ顔の美人さん」らしい。お愛想だと分かかっていても照れくさい。

ちなみにダナモさんはイヌ顔だった。特に一杯目のビールを飲んだ後、顔をくしゃくしゃにする瞬間がイヌっぽくて私のお気に入りだ。

店主夫婦が大阪にいる娘を訪ねる、という計画は私が働き出した直後からあった。時期は人が一段落する四月の中旬、店は休む予定だった。私は料理を作れない。けれどある晩、常連客たちの少々悪ノリ気味の提案もあり、新人のアルバイトに任せてみようという流れになつてしまった。

「まだ私、二ヶ月ですよ」

そう断つてみたが、もう話が決まっていることは雰囲気で見分かる。

当の店主夫婦は満更でもなさそうだし、何よりダナモさんが微笑みながら頷いていた。大丈夫、大丈夫。そんな声が聞こえるようで、何だか心強かった。だから思い切つて覚悟を決め「では頑張ってみます！」と宣言してしまつたのだ。

その日が来た。

朝、名古屋まで一緒に行き、新幹線に乗る店主夫婦を見送つ

た。いつもよりも早く起きたので少し眠い。分かりづらいから、という奥さんの警告どおり、名鉄の乗り場へ戻るのに迷ってしまった。エレベーターに乗ってキョロキョロしながら、ふと名古屋駅で降りるのは初めてだと気付く。

あの男の家まで、歩いて十分弱——。そう浮かんだが、実際に行こうという気持ちにはならなかった。それどころか、思い浮かべた男の顔に違和感がある。本当にこんな顔だったわけ、としっくりこない。けれどその違和感も、電車の中でウトウトするうち散り散りになってしまった。

ランチタイムの準備をしようと店に立ち寄ると、表のホワイトボードに大きく「本日、夜は乾き物のみ！」と書かれていた。御主人の字だ。それを見て思わず笑った時から、私自身もどこか弾んでいたのかもしれない。あつという間に時間が過ぎていた。夕方四時半。開店と同時にカウンターは全席埋まってしまったので、補助の椅子を三脚全部出したがそれでも足りず、一時は立ち飲みをしてみらう程の盛況だった。普段カウンターだけで足りているのが嘘みたいだ。

スルメ、柿ピー、缶詰。いつもとは比べようもない簡単なつまみだが、みんないつもと同じく楽しくそうに飲んでいる。ダナモさんは一番乗りだった。カウンターの一番奥でスルメ片手にビールを飲みながら、たまに「そうだなも」と呟いている。やっ

ぱり彼はイヌ顔だ。

それにしても混んでいる。火も使っていないのに店内は明らかに暑い。暖房を消したがそれでも追いつかず、冷房に切り替えてもみんなの顔は汗ばんでいた。

「ミサトちゃんの人徳だがね」

みんなのお愛想を真に受けたわけではないが、こんなに短期間で居場所が出来た幸運を密かに嘯みしめていた。

この三ヶ月間、新しい生活に慣れようと精一杯で、追いかけてきた男について思い悩む暇はあまりなかった。今朝みたいたことが何度か続くうち、完璧に彼の顔を忘れてしまうのだろうか。もしかしたら私は脱皮したのかもしれない。

「のお、ミサトちゃんの人徳だがね？」

そんな声に、ダナモさんはいつもより大きな声で「そうだなも」と応じている。

あつという間に九時になった。ようやくカウンター席だけで間に合うようになり、溜まっていた洗い物を片付けようとした瞬間、みんなが「じゃあ、お会計」と帰り支度を始めた。

一時間早いけど……。そんな顔をしているのは私だけではない。ダナモさんもだ。呆気にとられた若輩者二人をからかうように「ええから、ええから」とみんな会計を済ましては席を立つ。いや、ただ席を立つだけでなく、ダナモさんのことを私

に教えてくれる。

私と同じく元々は東京に住んでいたこと、個別指導の学習塾で先生をしていること、私が働くようになってから店に来る回数が増えたこと……。ダナモさんは否定するでもなく、瓶ビールを呑んでいる。少し顔が赤い。

そして常連客たちは、今度二人で天王川公園へ行くように、と勧めてきた。そろそろ「藤まつり」が開催されるという。立派な藤棚が夜はライトアップされて綺麗だからと口を揃え、日曜ならこの店も休みだから、と提案してくれる。急な展開に「いや、でも……」と慌てる私に、「おやすみ！」と笑いながら手を振り、とうとう全員帰ってしまった。

店には私とダナモさんだけ。どうやら人生の先輩方が示し合せ、気を回してくれたらしい。

疲れたので洗い物は明日にしようかな、と私の方から口を開いた。多分この人はルールを守って十時には帰る。もっと話があった。

「塾の先生だったんですね。知らなかった」

「まあ、うん」

「あと東京からって」

「ええ……」

ちよつと表情が曇った気がした。慌てて「実は私……」と、誰

にも言っていない津島に来た理由を伝える。

少し前に男と別れたこと、彼は新しい女が住む名古屋市内に引っ越してきたこと、その後を追いかけて来たが、同じ市内ではストーカーみたいだから津島市に住み始めたこと。

「……こんな話、ひきますよね？」

そうだなも、と言うかと思ったが「いや、全然」と彼は微笑んだ。さっきの少し曇った表情が浮かぶ。実はダナモさんも、私みたいな理由で津島に来たのかもしれない。

互いにその後は何も話さなかった。テレビから流れてくるニュースを聞きながら、彼は一度だけウーロン茶を注文した。私から「藤まつり」の話は、やっぱりできなかった。それは何となく怖い。

十時になる少し前に、ダナモさんはお会計を済ませた。席を立つ寸前、残っていたウーロン茶をぐいっと飲み干し、「ミサトさん」と私の名前を初めて呼んだ。驚いて、うまく声が出ない。「あの、藤まつり、天王川公園の……。一緒に行ってもらえませんか？」

そうだなも、と言えはよかったのだが、慌てた私は妙に大きな声で「はい！」と返してしまった。

顔をくしゃくしゃにして笑っている彼は、やっぱりイヌ顔だ。

(了)

佳作

天王通りの喫茶店が売られる日 鷲尾裕二

自宅の最寄り駅から、それなりに混んでいる北行き赤い電車に乗る。ラッシュはそれほどでもない。しばらくして津島駅に急勾配で駆け上がり、7時53分に着く。高架駅と言っても一面2線のホームしかないし、高さも普通のマンションから見下ろされる程度の高さだ。でも、電車から降りて一息つき、電車が通り過ぎた後、人ごみの中から見えるこじんまりとした町の景色が好きだ。

その中でも、西に向かって津島神社まで伸びる天王通りは私にとって秀逸だ。その両側に並ぶ昭和感満載の商店や高さが揃ってない建物の列は、とても愛らしい。

ホームの規模に引換えやたら長い階段を降り、自動改札を通り過ぎ、空き店舗の列を見ながら、駅の構内を出る。ロータリーを越えた交差点の角が私の職場、尾張銀行津島支店。

自己紹介が遅れた、私は河野咲穂、26歳。みんなからはサキとか呼ばれている。独身彼氏なし。その辺の事情は放置しておいて欲しい。

「おはよう」

通用口から店に入ると、私の上司の橋本融資課長と出くわす。

「おはようございます」

「おはよう。河野、今日はあの石崎さんの売買があるから心して行けよ」

「はい、分かっています」

『あの石崎さん』というのは、借入の返済が遅れている60絡みのおばさん。夫婦で喫茶店を長くやっていて、津島では人が多く集まる人気の店だったようだ。このお店は石崎さん名義になっている。バブルの時期に津島といえども、自分の店にするには相当儲かっていなければならなかったことだろう。

けれど、2年ほど前に旦那さんが亡くなってから、おばさんは意気消沈してしまって、店を開けたり開けなかったり。これでは常連客も離れてしまう。そんなことから、店の改築資金で借りた借金の返済も滞りがちだった。私は返済をしてもらうために、おばさんに電話やら面談やらをしていた。けれども、

店の売上は安定せず、なかなか延滞状態からは脱出できなかつた。

「でもあのおばさん、よく店を手放して売れる気になつたよな。

うちの銀行は買主に融資できて、かつ延滞も解消できるのだからいいんだけどね」

そりゃ、融資課長としてはほくほくだらう。でも、私はおばさんの店に何度も督促のために足を運び、レジからなげなしの売上代金を集金して返済してもらつたこともあるのだから、複雑な気持ちになる。

「はい、ミスの無いようにしつかりやります。」

ある意味会話になつていない言葉を課長に返し、朝の準備に入る。

金庫からいろんなものを出し、朝礼も終わったところで、おばさんのことを考える。最後におばさんの店に行つたのはいつだつたっけ。確か一ヶ月くらい前に、やはり入金のお願いをしに行つたきりだ。確かこんな感じだつたはずだ。

基本的に内勤の私はシャッターが閉まる3時を越えてから外に出るから、その日もそのくらいの時間だつたはず。銀行を出て、天王通りを西に数分行くと、おばさんの店がある。築何十年かの時を経たいわゆる昭和の匂いを残した喫茶店。確かにこの平成の世では一見客はなかなか入りにくい感じはある。

ただ、ちょっと違つた意味での常連である私は、ちょっと違つた意味でためらいながら扉を開けて中に入る。

「こんにちは」

「いらつしやいませ。あれ、サキちゃん」

「ごめんさい、今日も入金のお願ひにきました」

「いいのよ、気にしなくて。あなたの仕事なんだから。今日は津島商工会議所の人たちが来て、打ち合わせして行つてくれて、ランチも食べてってくれたから、売上はそこそこあるわ」と言いながら、レジからお金を取り出す。

「今日も一回分でお願ひできるかしら」

変な話だが、こちらが恐縮してしまう気分になる。本当はあと一回入金してもらわねばならないのに。そして、コーヒー杯くらい飲んで行きなさいよ、の声の誘惑に躊躇なく誘われることになる。

いつもどおり、私に対する恋バナ（実例がなく想像ばかりであるが）や、気に入つた俳優の話、はたまた昔の津島の駅前の話などを聞いたような。

その時には、お店を売るなんて話は一回も出なかつた。

その日から度々訪問や電話はしたものの、店は閉まつていることが多く、ついぞ今日までおばさんには会うことがなかつた。

おばさんの店を売ることになつた、と聞いたのは、同僚の営

業の広瀬くんからだった。

なんでも、津島の商工会議所から、喫茶店を開業したいという鳥川さんという東京帰りの男性に融資をつけてくれないか、という話があった、とのことだった。石崎さんの喫茶店を居抜きで売ってもらおうよう、鳥川さんが申入れ、話がまとまったということだった。

鳥川さんへの融資話は、すんなりと稟議も通った模様で、売買の話は今日に決まった、と聞いたのが四日前。広瀬くんは出来る男だから準備は抜きなく、今回河野さんは出番ないよ、と言われたのには慥然とした。

でも、なんでおばさん、私に言ってくれなかったんだろう。

あつという間に午前10時になる。銀行の応接室に売主のおばさん、買主の鳥川さん、広瀬くん、仲介の不動産屋さんと、司法書士の先生と、そして私が一堂に会する。

おばさんとは、今日は大勢の人がいるからか、挨拶を交わしただけ。

一方、買主の鳥川さんはよく喋る。

「僕、もともと津島の人間なんです。津島高校へ通ってました。そこから東京の大学に行って、ほら、そのころ就職氷河期であまりいいところに就職できなかったんです。このままサラリーマンとしてうだつの上がないまま人生を過ごしていく

の、嫌だなと思って、いつかは地元に戻って、例えば喫茶店の

オーナーなんかの一国一城の主になりたい、と思って、一生懸命貯金して、で、津島に帰ってきて、アルバイトをしながら商工会議所の創業スクールに通って、そこで中小企業診断士の春本先生に厳しいご指導をいただいて、商売の実務を勉強しました。また、この懐かしい津島の町を歩いていて、学生時代いったこともある石崎さんのお店を見て、ああ、こういう雰囲気のある喫茶店をやってみたいな、と思ってることを商工会議所に話したら、石崎さんにつないでくれて、トントン拍子に今日、お店を買うことになった、という感じでもう、津島に帰ってきて本当に良かったなあ、と毎日思っていて……」

ああ、あの日の商工会議所の人達の打ち合わせ、というのはこのことだったのか、と改めて思う。とはいえ、あまりにも長広告なので、

「そろそろ、手続きに入りませんか」

と、思わず私が割って入ってしまった。

でもそこからは、広瀬くんの準備のおかげか順調に進んでいった。

「はい、これでお取引完了です」

広瀬くんが誇らしげに宣言する。尾張銀行津島支店の、いや広瀬くん自身の成績に直結するのは当然だが、鳥川さんは夢の

第一歩を踏み出せたわけだし。おばさんは借金を返して、まだそれなりのお金は残っている。これからの人生を過ごして行くには、やや足りないかもしれないが、それでも同世代の人と比べれば、恵まれたほうだろう。

不動産屋さんが、鳥川さんにいろいろな説明をしている。なんでもあまりにもスムーズに事が進みすぎて、おばさんのほうの引き渡しの準備が済んでいないので、一週間程度はおばさんは引越し出来ないらしい。

「サキちゃん、ちよつといいかしら」

と、声をかけられたのは、全ての手続きが終わって、皆が応接室から出るところだった。

「どうかしました？」

私の問いかけには答えず、席に座っている橋本課長に向かって、「おたくのサキちゃん、ちよつとお借りしますね」

と声を掛ける。課長はいきなり声を掛けられたせいか、どきまぎしてうなずいている。

「さて、ちよつと早いけど、ランチをごちそうするわね」

スタスタと銀行を出て、さっさと天王通りを歩いていく。外はちよつと寒い。歩道はあるものの、狭い道の割にはクルマの通る量が多いから、人はなんとなく縮こまって歩かなきゃいけない。だから人通りが少なくなる原因にもなるんだらうけど。

よって、私とおばさんは、反対側からくる人や自転車などに気

を使って、縦列で歩かなきゃいけなくなって、自然、会話も弾まない。

「さあ、着いたよ」

下を向いて歩いていた私は、おばさんの声で、店に着いたのがわかる。顔を上げると本日閉店の木札がかかっている。

「ささ、入って入って」

おばさんは、そのまま店のドアを開ける。この店売り物なのに、さらに言えばさっきの売買取他人さんのモノになったのに、鍵もかけずに出てきたらしい。おばさんらしい、と言えばおばさんらしいんだけど。

「あのお……」

一体なんて言っているかわからず、あいまいな言葉をおばさんに投げてしまった。

「いいのいいの、サキちゃんとちよつとお話したかったから、さあ、さっさと座って」

私はお気に入りの窓際の席に座る。

久しぶりに座るその古びたソファは、古びてはいるが風が遮られて太陽の光だけが入ってくるので、心なしか暖かい。

「ごめんね、サキちゃん。今日まで黙ってて」

「いいんです。鳥川さんの担当から聞いてましたから」

「いつものランチ作るから、ちよつと待っててね」

しばらく手持ち無沙汰で、この店の行く末を考える。鳥川さ

んがオーナーになったらどうなるんだらう。事業計画をちよつと見せてもらったら、昼間は喫茶店、夜はちよつとしたお酒も出すお店になるようで、内装の改装にも十分にお金をかけるみたいだから、この昭和の雰囲気も消えてなくなってしまうのかな。と思うと私も少し寂しくなる。

「おまたせ」

そう言いながら、おばさんは得意のハンバーグランチをテーブルに持つてくる。二つ分だ。

「私もご一緒させてもらっていいかしら」

と、にやりとしておばさんは向かいの席につく。

「あたりまえじゃないですか」

「では、ご同伴、甘えさせてもらって、いただきます」

「いただきます」

まず、私は黄身の焼き具合が絶妙な目玉焼きから手を付ける。ハンバーグのソースと絡み合ったこの味、いい。

「あのね」

「なんですか」

「サキちゃん、ありがとうね」

「いきなりどうしたんですか」

「いつも、返済が遅れがちなおばさんのところに集金に来てくれて、あまりいいお客さんでもない私に、いつも笑顔で接してくれて。私ね、他にも少しばかり借金があるけど、そういう

取立てに来る人って威圧感たつぷりで、そんな中、借金の取立てにくるのに、こんな おばさんの雑談にも付き合ってくれるし、なによりいつもニコニコしてて、こちらが逆に癒されてたところもあったの。サキちゃんには嫌な思いさせたかもしれないし、ほら、あの出来のいい同僚の営業マンにいいところを持つてかれたみたいだし、ごめんね」

「いえ、うちの成績にもなりましたし、そんなこと言っていたいで、うれしいです」

おばさんの顔を真正面で見ると、うるつときそうだから慌ててハンバーグを口に押し込む。これからこのハンバーグももう食べられないのかな。

「そういえば、これから石崎さん、どうするんですか」

「そう、それも言っておかないとね。私の姉がね、名古屋で小料理屋をやつてて、そこを手伝うことになったのよ。姉も独り身だから、二人口は食える、ではないけど、そこへ転がり込んで、家賃の代わりに手伝うことになったわけ。だからまた食べに来てね」

と言いながら、おばさんが差し出した角の丸い小料理屋の名刺を自然に私は受け取る。

「だから、このハンバーグもサキちゃんが来てくれるなら、出しちゃおうかな」

ちよつとだけ、ほつとする私。でもどうも涙腺が緩みそうで、

無言でご飯を頬張る。

おばさんの間わず語りは続く。

「それでね、この店も、平成が始まる頃からだから、30年近くやっていると、愛着もあるけれど、もう時代遅れかな、と思うところもあるの。鳥川さんみたいな若い方が、新しい感性で新しいお店を作って行かないと、天王通りも、津島も古いままで取り残されちゃうんじゃないか、とそう思ったから、それにね、あまりサキちゃんにも迷惑かけてもいけないから……」

思わず鼻をすすってしまふ。いけない。

「まあ、思ったよりいい値段で買ってもらえたというのが一番の決め手だったかもしれないけれどね。それでもやっぱり長年ここで商売してきたんだもの、この天王通りにも、津島にも愛着あるわよ。少しでも賑わいを大きくするためにも、こんな老いばれが開店休業状態で店をやるよりも、もう新しい人に後を託して、しっかり店を開いてもらったほうがいいと思つたのよ……」

おばさんの声のトーンも変わる。おばさんも自分が作つたサラダを口に運ぶ。

そこからは二人とも無言。

鼻の奥がツンとなりそうなのを、ハンバーグの旨さでごまかすんだけど、そして飲みたくもないお水を飲むんだけど、おば

さんがこの店で作るランチはこれで最後になるんだろうなという思いが、また泣きそうになる気持ちを喚起させたりして、もう行ったり来たりで気持ちはずちゃぐちゃ。

「ごちそうさまでした」

「コーヒーも飲んで行きなさいよ」

と、キッチンに戻り、カップを二つ運んできて、自分の席に座るなり、もう話すことは話尽くしたのか、ゆつたりと外を見ながらコーヒーをすすり出すおばさん。

「そろそろ帰ります」

コーヒーの味はあまりわからなかったけれど、もうこれで十分だ。この店の雰囲気は十分味わったよ。

「そうね、あまり油を売っているとあの課長さんに叱られるからね」

「えっと、お勘定は」

「いいわよ、今まで迷惑かけてきたお詫び」

遠慮なく好意を受け取ることにする。ちよつとお辞儀をしておいた。

「また来てね。この店にも」

「はい、新しい喫茶店も見たいです」

「あなたたちみたいな若い子が来ないと、こういう店はダメだからね。それからよかつたら名古屋の方にも来てね」

「はい」

あまり長く喋りすぎると、また涙が出そうだから、お辞儀をして外に出る。

天王通りを銀行まで帰る途中、名残惜しくて振り返ると、年輪を重ねたおばさんの喫茶店が小さく見えた。小さいながらもこの通りの一員として根を生やしてきたお店。近々衣替えをするが、はやくこの通りに溶け込むといい。

ふと気づくと向かい側に観音寺が見えた。

そうだ、おばさんの今後の人生が平穏なることを、それと新しい鳥川さんの喫茶店の繁盛を祈って、そしてこの天王通りに関わる皆が幸せであるよう、お賽銭を上げていこう。

課長の怒り顔がちらりと頭に浮かんだが無視。
お祈りしたあと、観音寺と同じ敷地の稲荷堂のおみくじを引いた。
吉と出た。

〈了〉

佳作 大きな金魚

舛田 順一

「おかあちゃん、おかあちゃん……」

大きな金魚が、ゆつくりと目の前を通り過ぎてゆく。僕は必死で大きな光る金魚を追いかけて、母とつないでいた手をうっかり離してしまう。母に名前を呼ばれて振り返ると、その後ろ姿が人ごみに消えていくところだった。顔の見えない母がスローモーションのコマ送りの映像のようにゆつくりと消えてゆく。泣いても、泣いても母はもうどこにもいない。

「あなた、あなた。栄一さん。……、大丈夫なん。えらい、うなされとつたよ」

目を開けると、心配そうに僕を覗き込む妻の裕子の顔が見える。

「ああ、……夢か。ごめん。また、子供の頃の夢を見ていた」

不安そうな顔をした裕子が小さな声で聞く。

「また、金魚の夢なん？」

三歳の頃、僕は香川県の高松駅の構内で迷子として保護されたそうだった。駅のアナウンスで何度呼びかけても誰も現れず、若い駅前の交番の巡査が僕を抱きかかえて、構内をずっと親を捜して歩き回ってくれたらしい。駅員が目撃していた僕と同行し

ていた母親らしい人は見つからぬまま、結果的に迷子の書類には育児放棄と記入された。僕は高松市内の児童養護施設に預けられ、そこで高校卒業まで育った。

親から捨てられた僕が、身につけていた唯一の身元の分かったようなものが、赤い袋に金糸で「津島神社」と刺繍したお守りだった。そんな大切なお守りを僕は何度も捨てようとした。学校で一番の成績なのに保証人がいないからと奨学金がもらえず大学進学をあきらめた日には、悔しくて母を恨んで泣きながらお守りを捨てようとした。ゴミ焼却炉に放り込んだものを、お節介にもそうじ当番だった、その当時クラスメートだった妻の裕子が見つけて、僕に届けてくれたことで燃えずに残った。

高校を卒業すると施設の仲間たちは都会に出ていったが、僕は香川県丸亀市の職業訓練学校に通ってコンピューターの資格を取ると、丸亀市にある情報システムの会社に就職して香川に残った。都会へ出ていかなかった理由は、僕を捨てた母が近くにいるのではとの思いからだ。唯一の絆であるお守りの津嶋神社に近い場所にいれば、もしかして母親に会えるのではと

甘い期待があつたからだ。僕は僕を捨てた母をずっと恨んでいて。ところが年齢を重ねるうちに、自分が子を持つ親になつてみて、少しずつ母にもどうしようもない事情があつたに違いないと思うようになり、少しずつ母親への恋しさが募り会いたくして堪らなくなつた。

津嶋神社は香川県三豊市にあり、瀬戸内海に浮かぶ神社だけがある小さな津島にある。子供の守り神として、香川県ではとても有名な神社だ。陸地から島までは二百五十メートルあり、普段は通行できないのだが夏の大祭の二日間だけ橋に板がかけられ橋を通ることができる。親子が手をつなぎ渡り、神前で無事に育つことを祈るのだ。

三歳の記憶しかない僕は何も覚えていないのだが、僕も母と橋を渡つてお守りを買つてもらつたに違いないと勝手に想像している。ただ解せないのが、巨大な光る金魚を見た記憶があることだ。夏の大祭では花火も打ち上げられるが、金魚に見える花火というものに、まだお目にかかつたことがない。

「今日から出張だつて」

妻の裕子が子供たちの弁当を作りながら、眠そうな顔をして言う。陸上部の学生時代の細かつた面影はなく、縦か横か分らないほどにふくよかな体型である。丸亀発の朝一の特急は午前七時発だ。寝過ごして遅れそうな僕は、トーストを口にくわえたまま慌てて背広に着替える。

「ああ、愛知県に出張だ。何ヶ所か回るから三日ほど戻れない。子供たちを頼むな」

高校二年の娘と中学三年生の息子は、早朝なのでまだ起きてこない。もうすぐ五十になる僕の仕事は、自社で開発した機械メーカー向けの生産管理のコンピュータシステムを販売する営業マンだ。僕も妻にえらそうに言えた体型ではなく、会社の健康診断ではいつもコレステロールが高くウエストも九十センチもあり、仲の良い保健婦さんからはダイエット方法をいろいろと指南されている。

丸亀駅から特急に乗り瀬戸大橋を渡り岡山へ、新幹線に乗り換えると名古屋まで二時間強だ。午前中は名古屋市内の馴染みの会社を営業で回る。お昼は大好きな味噌煮込みうどんを食べると、名鉄名古屋駅一番線ホームから岐阜行きの特急に乘つた。十分弱で須ヶ口に着き、津島線に乗り換えて十五分、目的地の津島駅に着いた。

名古屋は何度も来ているが津島は初めての訪問だ。途中の名鉄の車窓からの眺めが僕好みののどかな景色で、初めて降りた駅なのに心がとてもほっこりする。正面出口を降りると、左手にバスターミナルがある。その景色を見た僕は不思議な気持ちになる。いつか見たことのある風景のような気がしてならないのだ。僕は日本中を営業で回っており、地方都市の何処にでもありそうな駅前のバスターミナルの風景なので、何処かか思い

出せないが今までに訪ねたことのある街に似ているのかもしれないと、その時は思っていた。

津島では津島市民病院の近くにある津島精密機械という会社を訪問し、コンピュータシステムのデモ説明会を行う予定だ。電話でアポイントを取った業務部の山上部長は、午後二時までは本日出荷の作業で忙しいので、二時すぎに訪問するように指示されていた。駅構内には売店しかなく時間をつぶす所がなかった。時刻表で津島市民病院前を経由するバスの出発時間を確認した後、お茶が飲める場所を探す。あたりをきまよろきよろしている、駐車場の向こう側にバンビという看板の喫茶店を見つけた。重いキャリーバッグの荷物を引っ張りながら、駅前からぐるりと回って一筋奥の筋に入る。喫茶店のドアを押して中に入ると、昔ながらの純喫茶という風景が広がっていた。入り口近くのこげ茶色のビニール貼りの年代もののソファの席に腰掛ける。

「いらっしやい」とカウンターから声がかかる。

水の入ったコップをお盆に載せ、細身の年配のご婦人がカウンターから出てきた。

「ご注文は何になさいます」

「コーヒー下さい」

昔はさぞかし美人だったろうと想像できる、目鼻立ちの整ったママさんが一人で切り盛りしているお店のようだ。例えると

二時間サスペンスのドラマに、旅館の女将として出てきそうなタイプのご婦人だ。しばらくしてコーヒーが出てきたが、頼んでもいない厚切りのトーストが半分とゆで卵がついていた。

「えー。僕、コーヒーしか頼んでないですけど」

「モーニングです」

ママさんはニコツと笑いかけた。正午を過ぎているのにモーニングとは、さすがモーニングで有名な名古屋市の近郊の都市だと驚いた。名古屋市内で食べた味噌煮込みうどんでお腹はいっぱいだったのだが、用意してもらったのでありがたく頂いた。一時間以上待ち時間があるので鞆からノートパソコンを取り出すと、本日行うコンピュータシステムのデモンストレーションの手順を確認していた。長時間居座って迷惑な客の僕に、ママさんは昆布茶に小袋のお菓子まで出してくれた。津島という土地柄なのか、この店が特別なのか、ママさんのおかげで初めて来た津島の街が好きになる。

鞆からお客様向けのデモ資料を取り出して内容のチェックをしようと、脱いで椅子にかけていた背広の上着のポケットにさしていたペンを取ろうとしていて、ポケットの中に入れていた母からもらった大切な赤い津島神社と刺繍されたお守りが落ちた。気付いたママさんが落ちたお守りを拾ってくれた。手渡す時に、お守りを見て言った。

「あら、大きいキャリーバッグだから、遠くから来た人だと思っ

ていたのだけど、地元の方だったの」

「いいえ、四国から来ました」

「え、でもそのお守り、津島神社さんのものでしょ」

「はい、津嶋神社の、香川県の家の近くにある津嶋神社のものなのですけど」

「香川？ 香川県にも津島神社があるの。私が言っているのは、この津島という地名にもなっているように、津島の中心にある津島神社のことなんだけど」

「えー、ここにも、津嶋神社があるんですか」

駅を降りた時に津嶋神社のある島の津島と同じ名前の市だとは気づいていたが、ここにも津嶋神社があるらしい。ママさんは津島市の観光パンフレットを取り出してくると、津島神社の写真を見せながら説明してくれた。津島神社は日本中にある病氣、災難よけの神様の天王さんの総本社であり、戦国時代はあの有名な織田信長が氏神としていた神社なのだそう。写真を見ると香川の津嶋神社より社は大きくりっぱだ。七月の第四土曜日と翌日に行われる尾張津島天王まつりは、日本三大川祭りのひとつで六百年の歴史があるらしい。天王川公園で行われる宵祭りで巻藁舟に飾られた無数の提灯が美しいと説明されて、祭りの写真を見せてくれた。

「ほらこれが、巻藁舟。本物はとても綺麗で幻想的よ」

五艘の舟の上に五百余りの赤い提灯を、丸い傘のような形に

組み上げて乗せ、暗闇の川面に浮かべて、あかりをつけた夢幻的な写真を見た瞬間、僕は声を失った。いつも見る夢に出てくる、あの大きな金魚がそこにいたのだ。

ママさんは続けて、翌日の朝祭で行われる屋台の上に能人形を乗せた六艘の車楽舟の話がされていたが、僕の耳にはもう何も届かなかった。頭が大きな金魚の映像でいっぱいになり、我慢できずに再びお守りを取り出すと、話を遮るように僕は聞いた。「ママさん、すみません。このお守りって、本当に津島神社のものでしょうか」

ママさんは手に取ってじっと眺めている。

「そうね、けっこう色あせて年代もののお守りだから自信はないけど、この濃い赤色には記憶がある。たぶん昔、津島神社が授けてくれたお守りと同じだと思っわ」

僕はずっと香川県にある津嶋神社のお守りだと信じてきた。津嶋神社の嶋は山へんに島だから違和感があったのだが、津嶋神社のある島自体の名前は津島なので、昔はお守りも山へんなしの普通の島を使っていたのだらうと勝手な解釈をしてきた。頭の中が混乱していた。それならなぜ香川県の高松駅で捨てられた僕が、遠く離れた愛知県の津島神社のお守りを持っていたのだらう。しかし大きな金魚に見える提灯で飾られた巻藁舟の写真を見て、初めて降りた駅前の風景に懐かしさを覚えた事実を思うと、強烈な鳥肌がたつてゾワゾワと電気が流れるような

感覚が僕の体中を走った。全てが間違いだったんだ。

「津島神社の場所は近いのですか」

顔色の変わった僕の様子を見て、ママさんは何か事情があると察知してくれたようで、地図まで書いてくれた。時間がきたのでママさんにお礼を言い、僕は喫茶パンビを後にした。

予定どおり津島精密機械という会社を訪問し、コンピュータシステムのデモ説明会を行ったのだが、お客様には申し訳ないのだが心ここにあらずという状態で支離滅裂なデモンストレーションになってしまった。システムを見てもらった山上部長は、筋肉質で体育会系の方だった。素直に説明の不備を謝って、一時間程で説明会を切り上げた。

急いで津島市民病院まで戻ると、病院前の乗り場からタクシーで津島神社へ向かった。大きな赤い鳥居の前でタクシーを降りると、りっぱな楼門が見えていた。豊臣秀吉が寄進した大きな楼門をくぐると、右手に見える本殿はとても大きくりっぱだ。本殿は檜皮葺で徳川家康の四男で清洲城主だった松平忠吉の健康を祈願して妻の政子が寄進されたものらしい。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と、オールキャストが津島神社にかかわっており重厚な歴史を感じる。

まずは参拝してからと思ったが、気持ちが悪く焦ってそれどころでない。僕は本殿入り口横にある御守り授与所へ直行した。津島精密機械でコーヒーをご馳走になったのに、何故か口の中が

乾いて仕方がない。お守りが本当にこの神社のものか知りたい。

窓口には巫女さんが何人かいたが古いことは知らないのではと思ひ、たった一人だけ座っている若い男性に話しかけた。

「すみません。このお守りなのですが、ここで授けられたものでしょうか」

怪訝そうな顔をした若い人に、お守りを渡して見せる。

「このお守りですか」

不思議そうな顔をしながらも、痩せて黒縁めがねをかけた彼は、お守りを手に取りじつくり眺めている。

「すみません欄宜、このお守りですが、うちのものでしょうか」

若いから知らないのか、奥の方に座っている年配の人に尋ねてくれる。

「おやおや、懐かしい。これは、三十年以上前のものですな」

白髪で短髪の年齢を重ねた小太りの男性が窓口顔を出した。

「お尋ねの、このお守りならうちのものです。大切にされておられるようすな」

「はい、母からもらったもので」

「いやね、実はこのお守りの青色の袋のものを、今でもよく見ますものでな。赤色のもあつたんだ、懐かしいな」

若い人が年配の人の話を聞いて驚いたように言う。

「ああ、確かに。田村のおばあさんがいつも大切に持っているお守りと同じだ」

突然の言葉に心臓が縮み上がる。夢なら醒めないで欲しいと願う。あまりに動揺してしまい、うまく言葉が出てこない。

「あのう……、すみません。……、その田村さんというのは、どなたなんですか」

年配の人が代表して答える。

「信仰深く熱心なご婦人です。毎日夕方になると欠かさずお参りされております。今日はまだ見ないようだが、ぼちぼち来られる時間だと思えますよ……」

すると若い人が左の拝殿の方を見て言った。

「噂をすれば、ほら。田村さんが見えられた」

振り返ると小柄で白髪の上品そうな年配の女性が、南門から拝殿の方に向かってゆっくりと歩いてくるのが見えた。僕には、夢の中と同じようにスローモーションのコマ送りの映像のようにゆっくりと見えた。夢のように消えては大変と、慌てて拝殿の方へ行こうとする僕を、追いかけるように年配の人が聞く。

「失礼ですが、あなたのお名前は」

「はい。田村栄一です」

〈了〉

応募点数一〇二編

ありがとうございます

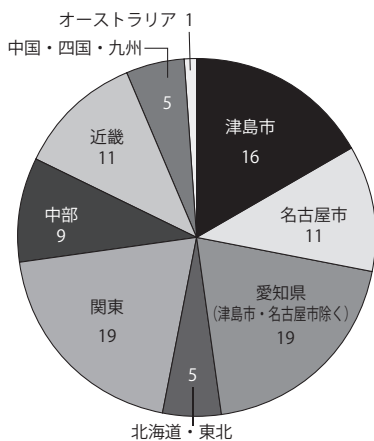
津島への来訪者を増やすことによりまちに（にぎわい）を創出する「津島（にぎわい）創出プロジェクト」。その取組のひとつとして、「津島短編小説コンテスト」を初めて実施しました。作者の年齢は、十六歳～九十一歳までの幅広い年齢層の方から応募があり、応募総数は一〇二編でした（選考対象は九十六編）。

作者の居住地は、津島市内十六作品、名古屋市内十一作品、その他愛知県内十九作品となり、愛知県内からの応募が約半数となりました。また、国内だけでなく海外からのご応募もありました。

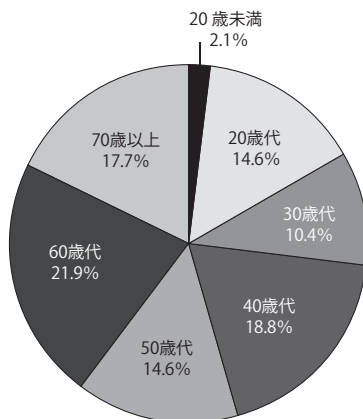
舞台となった場所は、津島市を代表する観光スポットが上位を占め、それぞれの作者にとって愛着のある場所を舞台とした作品となり、津島市の魅力を様々な視点で伝えていけるバラエティーに富んだ作品を応募頂きました。

一次選考は十一月から十二月にかけて実施され、十四編が最終選考作品として選ばれました。最終選考会は平成二十九年一月二十三日に行われ、大賞一編と佳作二編が選出されました。たくさんのご応募、ありがとうございます。

住所別応募者数



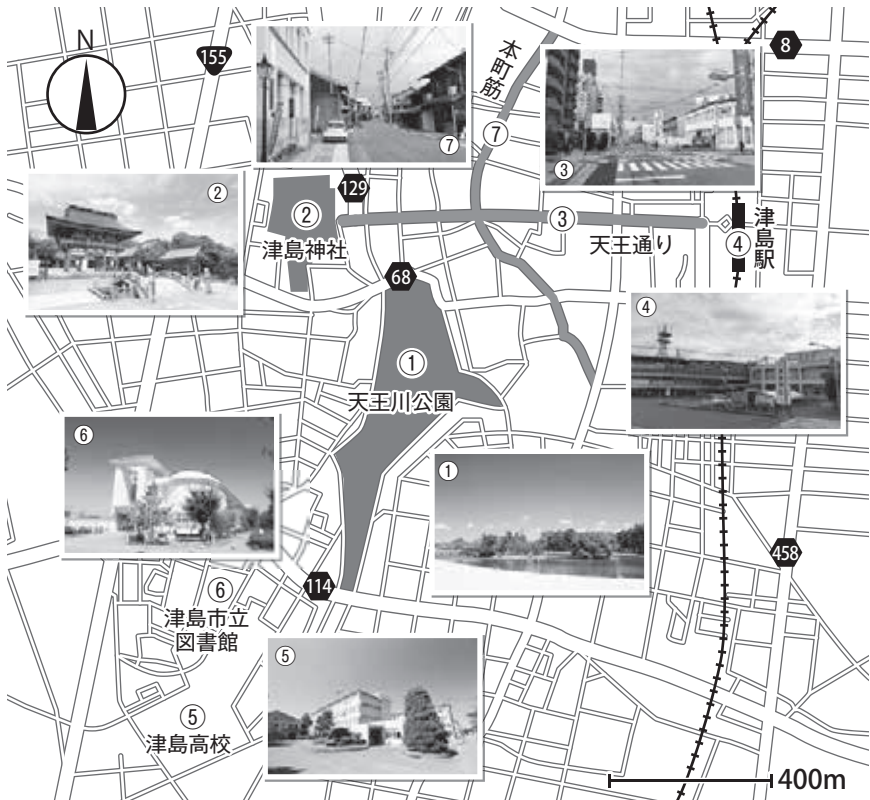
年代別作品応募数



※選考対象外の六編を除く

舞台となった主な場所

場所（選考対象外含む）	件数
天王川公園	64
津島神社	39
天王通り	11
津島駅	11
津島高校	6
津島市立図書館	5
本町筋	5



短編小説コンテスト募集要項

◎募集期間

平成28年7月1日金曜日～10月31日月曜日

◎応募作品

下記に該当する短編小説

- (1) 津島市を舞台とした作品であること
- (2) 日本語、縦書きで400字詰め原稿、12枚～20枚の作品であること
- (3) 応募者が創作した未公表の作品であること

◎応募方法

- (1) 専用WEBサイトからアップロード
- (2) 郵送(〒496-8686 名古屋市中区葵二丁目19番30号 津島にぎわい創出プロジェクト事務局(短編小説コンテスト係)宛て)
- (3) 持参(「津島にぎわい創出プロジェクト事務局」名古屋市中区葵二丁目19番30号 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)名古屋内平日午前10時～午後5時)

◎選考

・一次選考で選出された作品を対象に、最終選考委員5名による最終選考委員会を開催し、受賞作品を選出します。

・最終選考委員は、委員長 堀田あけみ氏(作家・大学教授)、清水義範氏(作家)、清水良典氏(文芸評論家)、熊澤尚人氏(映画監督・脚本家)、木全純治氏(映画館支配人)

◎賞

大賞(1編) 賞状、副賞(30万円)
佳作(2編) 賞状、副賞(10万円)

REDISCOVERY TSUSHIMA
津島短編小説コンテスト

平成28年度受賞作品集—愛知県津島市が舞台の短編小説

発行 津島市
〒496-8686 愛知県津島市立込町2丁目21番地
TEL (0567) 24-1111

平成29年3月1日発行